子どもと向き合わないための働き方改革

妹尾 昌俊　氏
教育研究家、一般社団法人ライフ＆ワーク代表理事

（プロフィール）
徳島県出身。野村総合研究所を経て2016年より独立。
政府の委員（中教審、部活動ガイドライン検討会議など）や教育委員会のアドバイザーも務めた。
おもな著書に『先生を、死なせない。』、『学校を面白くする思考法』など。
5人の子育て中。

働き過ぎの問題、小学生に聞かれたら

　数年前に、先生たちの長時間勤務の問題について、小学生向けに解説してほしいと新聞社から頼まれたことがあります。さて、どうしたものか。大人向けよりよほど難しかったのを覚えています。
　みなさんが、児童生徒から「先生の仕事って忙しい？なんで？忙しいとやっぱりいろいろよくないことがあるのかな？」と聞かれたら、どう答えますか。
　正解がひとつしかない話ではありません。参考までに、わたしがひねり出した文章を紹介しますね。

先生のなかには、毎朝7時台に来て、夜9時、10時まで頑張る人もいます。みなさん児童のために一生懸命なのはいいことですが、体をこわしてしまうこともあります。
ところで、みなさんは日ごろどんなふうに勉強していますか？本を読んだり人から話を聞いたりしていますね。大人もそれは同じですが、忙しい先生のなかには勉強時間がなかなか取れない人もいます。先生だからといって、勉強しないでいいわけではないのです。社会や科学は日々進歩しているので、先生たちも学び続けています。日本の先生は外国と比べても、1人でたくさんの種類の仕事をしています。授業はもちろん、卒業式など行事の準備や宿題の確認、家庭への連絡や相談、給食費などのお金を扱う会計、打ち合わせ……。
先生が早く帰られるようにするには、どうしたらいいでしょうか？宿題のコメントを簡単にしたり、夜に学校に電話をかけるのをやめたりすることも必要かもしれないですね。
（朝日小学生新聞2018年2月10日）

この小学生向けのメッセージで、一番こだわった箇所が「忙しい先生のなかには勉強時間がなかなか取れない人もいます。先生だからといって、勉強しないでいいわけではないのです」というところです。読者のみなさんの毎日は、いかがですか？

人はなにから学ぶ？

関連した話題を。出口治明さん（立命館アジア太平洋大学学長で「知の巨人」と呼ばれている）は、「人は３つのことから学ぶ」（学びのルートはおおむね３つに整理できる）述べています。この３つとは、なんだと思いますか？熊本県でのアドバイザー派遣事業を含め、わたしの研修、講演ではこのナゾナゾをよくやっています。
「人は学校から学ぶ」とか「睡眠学習」ではありませんよ(笑)。

仕事人間で、長い時間職場にいる。うちに帰ったら「フロ・メシ・ネル」だけの生活では、知的生産が大事な仕事ではうまくいかない、と出口さんは言います。「仕事を早く終えて、人に会ったり、本を読んだり、ときには旅したりと、脳に刺激を与えないと、画期的なアイデアは生まれないでしょう」。
そう、クイズの答えは「人、本、旅」です。
「人から学ぶ」というのは、言うまでもありませんね。職場のなかでの学び、それから職場の外の人との学び、両方大事です。
「本から学ぶ」とは、過去の反省や歴史上の失敗などを学ぶのに非常に豊富な情報、知恵が本（書籍）には詰まっているからです。
「旅から学ぶ」とは、旅行という意味だけでなく、気になる現場に出かけて行くことを指しています。

みなさんは「人、本、旅」から学び続けていますか？

子どもと向き合うため、本当？

これまで文部科学省や多くの教育委員会は「子どもと向き合う時間の確保のために、働き方改革をしましょう」と呼びかけてきました。このおおよその趣旨としては、会議や事務作業などの間接的な業務をなるべく減らし、児童生徒の相談にのったり、授業準備をしっかりしたりするほうに時間を振り向けようということです。
さて、みなさんは、このキャッチフレーズは、本当だと思っていますか？
ちょっと意地悪な質問だったかもしれませんね。ですが、ここに学校の働き方改革のエッセンスと難しさがつまっているようにも思います。
＊
この理念は「半分合っているが、半分間違っている」とわたしは考えています。
上記のように、事務作業等を減らすことには賛成です（ただし、たとえば会議の見直しでチームワークが悪くなってはいけないので、必要な会議は残す、充実させるべきですが）。

　ところが、「子どもと向き合う時間の確保」と言っているかぎり、おそらく、多忙はいつまでも解消されません。多くの場合、先生方は児童生徒と向き合って、忙しくなっているのですから。部活動指導や丁寧な採点・添削などが典型ですが、子どもと向き合い過ぎているから、あるいは、「子どもたちのために」と思うがあまり、過重労働なのです。

自分と向き合う、自分の好きな時間を大切にする

　むしろ、「自分と向き合う時間」をもっとつくるために、いまの働き方を見直す必要がある、と捉えたほうがよいと、思います。「自分と向き合う」とは、自分の好きなことをする時間や自己研鑽などで幅を広げる時間を大切にすることです。先ほどの「人、本、旅」の学びの時間を確保することにも通じます。
　とはいえ、そんなにマジメに考えすぎなくてもいいですよ。趣味の時間や遊びの時間、たまにはデートに行きたいしね。そんな楽しい時間を確保するためにも、限られた時間でちゃんとした仕事をする。限られた時間で一生懸命子どもたちのためになることをする。こうした発想でよいのではないでしょうか。
　先生たちが人生を楽しんでいる、なにか好きなことを探究している。そのほうがきっと授業だっておもしろくなるし、子どもたちにとっても魅力的だと思うんです。

（参考）
出口治明（2019）『知的生産術』日本実業出版社
妹尾昌俊（2019）『こうすれば、学校は変わる！「忙しいのは当たり前」への挑戦』教育開発研究所